

坂昭如さんと田中小実昌さんだった。この二人は、新宿の飲み屋で会って親しくなった。これは前にしゃべったね。

高山 だから、憧れの人が意外と簡単に友達になつてくれる雰囲気があるときに、はあというか。今は名刺を出して、「よろしくお願ひします」なんて、たいへんだけれど。

▽清水哲男、昶兄弟

幸綱 そういうことで名前を挙げておくと、清水哲男、清水昶兄弟を思い出す。二人とも詩人として知られていた。過去形で言っちゃいけないな。清水哲男と俺が同じ年。彼は河出書房で同僚になる。編集者としては先輩だけれどね。弟が清水昶、三歳くらい下じゃないかな。この二人とはずっと付き合うようになる。この二人はよく飲む兄弟だった。清水昶は本当に酔っ払うんだよね(笑)。いちばんの思い出は、神保町にあった一橋講堂で「現代短歌シンポジウム」をやったとき、ゲストに清水昶と何人か出てきたんだけど、舞台の上で酔っ払っちゃってね、大騒ぎになった。俺がシンポジウムの責任者で、座談会の司会者だったのかな、たいへんだった記憶がある。支離滅裂、怒鳴ったり、ふざけたり……。今だっ

たら社会的に排除されちゃうかもしれないね、今は礼儀ただしくなつて、というか、みな臆病になつて、そういう変わった奴が全然いなくなつたね。

詩を作っているとか、短歌を作っているとか、日常性からはみ出して向こうの世界に行つちゃうというのもありはず、とも思うけれど。今は、そういう人が詩の世界にも短歌の世界にも居られなくなつちやうた。みんな卒内で、あるいはテリトリの中です話しかければならなくなつた。おとなしすぎる。彼を思い出すと、そんなことを言いたくなる。清水昶は桁外れなところがあつたね。

詩人の石原吉郎について教えてくれたのが昶君です。石原さんはシベリア抑留体験を持つ独特な詩人だった。これはまた別の機会にしゃべりますが、現代詩の中では、短いシャープな独特の文体を持つ詩人だった。一九七七年に自殺されて、僕らも衝撃をうけた思い出がある。短歌もかなりの数作つておられて、『北鎌倉』という歌集もある。短歌についてもシャープな評論を書いていて、俺はかなり影響を受けた。ただ、石原さんとはついに一緒に飲んだりしたことはなかった。残念だったと思つています。

高山 先生は清水昶さんとは仲良しでしたね。

幸綱 好きだったね、お互いに(笑)。

高山 一回、清水昶さんが、佐佐木先生が講演しているとき、「こらッ、幸綱ッ」て、酔っ払つて演壇に突進していく姿を見たことがあつて、どうなのかなとちよつと心配はしていたんですが、あれは実は仲良しだったからですか。

黒岩 小紋潤さんも結構、清水昶さんが好きだった。「昶さん、昶さん」つて。お兄さんの哲男さんには「心の花」にも連載してもらつていましたね。

高山 清水哲男さんは、朝のTBSラジオに出ているのをタクシー乗務のときによく聴いていたよ。

幸綱 ずいぶん長い間、ラジオのパーソナリティをやっていたから。二十年か、もつと長かつたかな。

黒岩 哲男さんは結構、野球小僧で、野球が好きなんです。

幸綱 そうそう。昔、「プロ野球年鑑」とかいうのがあつて、ジャイアンツやタイガースの「背番号いくつは誰それ」つて、全部、暗記してた。

加古 控え選手も含めて全部ですか。
幸綱 もちろん、全部。